

じて敢為の氣質に富み、思ったことを必ず果たすという風がある」とアメリカ人の気力と行動力を評価していた。

しかし、二十一世紀の暁に暴走した金融が招いた危機から必死に立ち直ろうと、そのアメリカまでもが、政府が経済に直接介入し、民間企業の所有者となる国家資本主義への入口に立っている。いま、渋澤栄一がいたら何を思うであらう。

もちろん、想像しかできない。ただ、栄一の玄孫として生を受けて、小学二年から大生までアメリカで育ち、長年、米系投資銀行やファンドに勤めた小生が事業独立をきっかけに紐を解いた伝記資料を参考にすると、おそらく栄一はこのようなことを言ったであらう。

「最近の社会は秩序的になっ

て、人々は何事にも慎重な態度を取っておる」

「いままでやってきた仕事を大切に守って、間違いなくやるということだけではなく、

うに叫ぶようではダメだ」

「経済的動機と仁義道德心の両立が大切なのは、自分の幸せの持続のためでもある」
いま渋澤栄一がいたら、こ

ガリアの地

有馬朗人

塔映し水の豊かに温みけり

船住みの女が咲かすクロッカス

復活祭鶏が飛び出す絵本かな

鶯の巣を先づ王宮の煙突に

巣づくりの草水に浸け鶯

アネモネの丘や晩鐘はるばると

揚雲雀ガリア戦記の山河かな

更に大きなビジョンを描いて行動しなければならぬ」

「本来、民間人が経済の元氣振興の主役であるべきはずなのに、すぐに政府が万能のよ

のように、「百年に一度の危機」だけではなく、どの時代においても普遍的なメッセージを発したことであらう。

アメリカが主導した二十世

紀に比べて、二十一世紀は多様な価値観によって複雑化している。ただ、多様な世の中でも人々が夜空を見上げると変わらない北極星があることも間違いないのである。

吉田茂邸の思い出

吉田章

(フランス語通訳)

三月二十二日、神奈川県大磯町に残っていた旧吉田茂邸が全焼したことを知ったのは、知人からのメールによってだった。

祖父の死後、売却してしまったため、私が最後に訪ねたのは、四半世紀ほど前のことになる。変わり果てた姿を二ユースで見たが、往年の豪華な調度が永遠に失われたかと思うと残念でならない。出火

ど、だからこそやり甲斐もある。次は、日常の何気ない一コマに虚を交えながら人物の心の動きを伝えたり、人間のおかしさや切なさを表現した作品を創りたいと考えています。長編小説より短編小説や詩、エッセイとでもいえばいいでしょうか。自分の中での短編アニメーションを作る意味がそこにあるような気がするのです、今はそんなアイデアを練っているところです。

残念なのは、短編アニメーションはまだまだ上映機会が少ないこと。大規模な劇場でかかることは珍しく、各地の映画祭などが主です。それも多くの人に知られず、仲間内で盛り上がっているという状況。インターネット配信は増えてきましたが、同じ映画ですからやはり大きなスクリーンで、良い環境で観てもらいたいと思います。勿論、劇場や配給会社を含めた問題で、課題は山積みです。

「百年に一度の危機」

と 渋澤栄一

渋澤 健
(コモンズ投信会長)

「人情の弱点として、利欲の念よりややもすれば富を先にして道義を後にする弊を生じ、過重の結果、金銭万能のごとくを考えて、大切なる精神上の問題を忘れて、物質の奴隷となりやすいものである」

世の中に向けられた言葉のよるに響く。百年前、渋澤栄一を団長として、五十一名の民間人が海を渡った。日本初の大型の「渡米実業団」はシアトルに上陸し、アメリカ大陸を横断しながら各地で政治、経済、社会福祉、教育など多方面の施設を訪問し、日米両国の親善を深めながら、通商の発展を促すことに努めた。ミネアポリスではウイリアム・タフト大統領、ニューヨークでは発明王のトーマス・エジソンなどと面談した後、西側へ向かい、サンフランシスコからハワイ経由で帰国した。三ヶ月間以上をかけて、五十三の主要都市を訪れた劇的な海外視察であった。なぜ、アメリカだったのか。

青年時代の栄一は尊皇攘夷に影響され、横浜の外国人居留地の焼き討ちを企んでいた熱血漢であった。しかし、運命の縁により幕臣となり、徳川慶喜公の弟の昭武に随行して万国博覧会開催中のパリに滞在する。欧州という異国で栄一の目が開いた。経済社会と資本主義、すなわち民間力を促す先進国の発展モデルを学び、日本へ持ち帰って、実践した。

ただ、十九世紀までは欧州の時代であったかもしれないが、二十世紀はアメリカの時代と栄一は読んでいた。一九〇二年から一九二一年の間に四回渡米し、当時の現役大統領と面会し、ニューヨークタイムズ紙から日本の「グラント・オールド・マン」という愛称で呼ばれていた。栄一も「多くの米国人に接して、米